Vol. 106, No.5 Jun, 2009 題字 故 一万田 尚登氏

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日 印 協 会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 106 年)

マンモハン・シン首相(左) プラティバ D.パティル大統領(中央)より組閣の指示を受ける
ソニア・ガンジー 国民会議派総裁(右)

(5 月 20 日付 インド政府公式 HP より)

目次

1. インド総選挙 ・・・

1. インド総選挙

外務省 南西アジア課長　進藤 雄介

4 月 16 日から 5 月 13 日の約 1 ヶ月間をかけて、インド連邦下院議員選挙が実施された。有権者が約 7 億 1400 万人という世界最大の選挙であり、投票は全国で 5 回に分けて行われた。このインドの総選挙は、近年の目覚ましい経済成長を背景に、南アジア地域、そしてグローバルな舞台で存在感を増しつつあるインドの向かう方向を占う重要な出来事であった。特に、世界規模での深刻な経済不況、更にはアフガニスタン・パキスタンでのテロ掃討作戦やムンバイ・テロ事件に見られる南アジア地域の不安定化の兆しの中で、重要な役割を期待されるインドで総選挙を受けて、どのような新政権が誕生するかに世界中が注目した。

いざ、ふたを開けてみると、結果は、与党のコングレス党が 206 議席(前回総選挙に比べ 61 議席増)を獲得し、事前の予想をはるかに上回る大勝に終わり、シン首相の続投が決まった。5 年の任期を全うした上で再選される首相は、1962 年のネルー首相以来実に 47 年振りのことである。今次選挙を振り返るとともに、選挙結果から予想される第二次マンモハン・シン政権の今後の政策を展望してみることとしたい。

1．選挙前の予想

今次選挙は、コングレス党率いる与党の統一進歩同盟(UPA)と最大野党インド人民党(BJP)率いる国民民主同盟(NDA)の対決を軸とし、コングレス党あるいは BJP のいずれか第一党となった政党の下で連立政権が成立する可能性が高いと見られていた。選挙前の世論調査では、コングレス党がやや優勢とするものが多かったものの、いずれにせよ僅差であり、選挙前の連立のメンバーでは過半数の獲得は困難とみられた。そのため、選挙後の連立政権の枠組みに大きな影響を及ぼすであろう左翼政党や地域政党の動向も、大いに注目されるところであった。いくつかの有力地域政党は、選挙後の連立工作でキャスティング・ボードを握るべく、自党の立場をオープンにするものもあった。

2．選挙結果

5 月 16 日に一斉に開票が行われたが、結果はコングレス党が事前のどのような楽観的な予想をも上回る 206 議席を獲得し、大勝した。コングレス党率いる UPA は 262 議席を獲得し、全 543 議席の過半数(272 議席)にわずかに 10 議席足りないという結果であった。他方で野党 BJP は、前回総選挙から 22 議席減の 116 議席にとどまった。前回の 2004 年の選挙でも BJP は議席を大いに減らしており、BJP の退潮傾向を印象付けることとなった。

コングレス党の大勝とともに人々を驚かせたのは、左翼政党の大敗であった。左翼政党は、地盤の西ベンガル州とケーララ州を中心に、前回の 59 議席から 24 議席へと大幅に議席を減らした。とりわけ、インド共産党(マルクス主義)(CPM)は 27 議席減の 16 議席となったが、その背景には、西ベンガル州の CPM 州政権が産業用地の収用に反対する地元住民と対立し、警官隊を導入した結果、多数の死傷者を生んだ事件などにより反 CPM 感情が高まったことなどが考えられている。

今回の選挙では、有力地域政党の獲得議席数が減少、あるいは伸び悩んだ点も注目に値する。コングレス党と BJP の議席数の合計が 300 を越えたのは、1998 年の選挙以来のことである。今回の選挙だけで判断することはできないが、地域政党の台頭傾向が収まり、有権者の支持が地方政党から全国政党へと回帰する流れが生じてきた可能性も指摘されている。

より詳細に見ると、インドに独特なカーストを基盤とした地方政党(社会主義党(SP、ウッタル・プラデシュ州)、民族ジャナター・ダル(RJD、ビハール州)、人民権党(LJP))が議席を大きく減らした。ダリット(指定カースト、俗に言う不可触民)出身女性として話題となり、コングレス党、BJP

の二大政党が振るわなかった場合には、首相になる可能性もささやかれていたマヤワティ・ウッタル・プラデシュ州首席大臣(Chief Minister, 州首相とも訳す)率いる大衆社会党(BSP)は、選挙戦初期の頃の大躍進の予想に比べれば、それを大幅に下回る2議席増の微増にとどまった。こうしたカースト政党は、1990年代以降、北インドの特定のカースト層を政治的に組織することで一定の基盤を確保してきたが、今次総選挙の結果は、カースト内の紐帯に頼るだけでは選挙には勝てず、きちんとした実績を有権者に示す必要があることを示している。これは、開発面で実績を上げた、ビハール州やオリッサ州の政権与党(それぞれ、ジャナター・ダル統一派(JDU)、ビージュー・ジャナター・ダル(BJD))が議席を大幅に増やした一方で、2年前の州議会選で大勝しながら、その後、開発面で顕著な実績のなかったウッタル・プラデシュ州の BSP の得票が大きく予想を下回ったことにも現れている。

3．コングレス党大勝の要因

コングレス党が大勝した理由としては、まず、過去5年間のコングレス党を中心としたUPA政権の政策が評価されたことが挙げられる。世界経済不況の煽りを受け、2008年度の経済成長率は6.7%に減速したものの、それ以前の4年間は約9%の成長率を達成するなど、シン政権が取り組んだ経済改革が有権者に好意的に受け止められた。

シン政権は経済改革を推進する一方で、庶民の暮らしを守る開発政策を標榜し(所謂「アーム・アードミー」(ヒンディー語で「庶民」の意味)政策)、農村と都市の双方で開発に取り組んだ。すなわち、農村では、「全国農村雇用保証法」により農村家庭への100日間の雇用の提供、農民の債務の帳消し等を実施、都市においても、「ネルー全国都市再生ミッション」でインフラ整備や都市貧困層の保護等を実施した。インドでは農村部や貧困層が有権者数の大きな部分を占めており、こうした弱者層へのきめ細かな政策が評価されたことが、コングレス党の勝利につながった。とりわけ、インドの過去の選挙では、有権者は政権与党には厳しい審判を下す傾向が見られたが、今回の選挙はそうしたジンクスを跳ね返す結果となった。

今回の選挙では、ソニア・カンディー・コングレス党総裁及びマンモハン・シン首相と並んで、あるいはそれ以上に、党の顔として活躍したのが、ソニア・カンディー総裁の長男であるラフル・ガンディー幹事長であった。弱冠 38 歳の幹事長は、今年 1 月に心臓のバイパス手術を受けた高齢(76歳)のシン首相はもとより、母であり党総裁のソニア・ガンディーを遙かに上回る回数の遊説を精力的にこなし、コングレス党の清新なイメージ作りに貢献するとともに、若年有権者層の支持拡大に寄与した(他方で、BJPは、次期首相候補が81歳のアドヴァニ元副首相であったこともあり、若年層を引きつけられなかった)。とりわけ、最大の票田であり、かつ、自らの選挙区も位置するウッタル・プラデシュ州でコングレス党が前回の9議席から21議席へと躍進したのは、ラフル・ガンディーの功績が大きい。選挙後シン首相を始めとしてラフル・ガンディーに対し入閣を求める声もあったが、本人は固辞し、党務に専念することとなった。シン首相が高齢に加え、健康問題を抱えていることから、シン首相が5年間の任期を満了する前にもラフルに首相の座を譲る可能性が指摘されている。今次選挙の最大の勝利者はコングレス党であるとともに、シン首相の後継者としての位置づけを確かなものにしたと見られるラフル・ガンディー個人であると言われている。もし、ラフル幹事長が首相になるようなことがあれば、初代首相ネルー、その娘インディラ・ガンディー、その息子ラジーヴ・ガンディー、そして、その息子ラフルというように、4代にわたり「ネルー・ガンディー王朝」から首相が輩出されることになる。

4．BJPの敗因

BJP は前回選挙の反省を踏まえ、今回は農民・貧困層対策に重点を置く一方で、IT 政策やインフ

ラ開発といった中間層の関心に焦点を当てた選挙綱領を発表し、独自色をアピールしたものの、党勢を回復するには至らなかった。BJP の敗因としては、次のような点が指摘される。

まず、BJP は過去の反省を踏まえ、党のイデオロギーであるヒンドゥー民族主義を前面に出すことは控えたものの、イスラム教徒たちはもとより、ヒンドゥー教徒の有権者からも党のイデオロギーの側面が嫌悪されたと見られる。今回の選挙でアドヴァニ首相候補と並ぶ BJP の党の顔として全国規模で遊説を行ったモディ・グジャラート州首席大臣は、2002 年のゴドラ事件(注)以来、「極端なヒンドゥー民族主義者」との印象が拭えず、BJP の宗派色を際だたせる結果となった。

また、ラフル・ガンディーのいとこで BJP から立候補したヴァルン・ガンディー(故ラジーヴ・ガンディー首相の弟で、事故死したサンジャイ・ガンディーの子息)が反イスラム教の宗派感情を煽る演説を行い、警察に逮捕されるなど物議を醸した。同人は BJP 公認候補として立候補し続け、当選を果たしたが、これも BJP のイメージ低下につながったと見られる。

さらに、オリッサ州でキリスト教徒やヒンズー教徒が過激なヒンズー主義者の迫害を受けた数件の事件を受け、同州のパトナイク首席大臣は BJP との協力を断ち、そのうえで自らが率いる政党ビージュー・ジャナター・ダルを勝利に導くなど、一部の地方政党が BJP 離れを引き起こしたことも敗因に数えられる。

要するに、BJP の敗北は、見方を変えれば、インドの世俗主義の勝利を示しているとも言える。

(注: グジャラート州ゴドラ郊外で、ヒンドゥー教の聖地であるウッタル・プラデシュ州アヨーディヤに巡礼を行った帰途にあるヒンドゥー教徒たちの乗車する列車が何者かに焼け討ちされた事件が発生、その報復としてヒンドゥー教徒たちがグジャラート州でイスラム教徒を無差別に襲撃したが、モディ首席大臣はそれを傍観するだけで有効な対策を取らなかった、あるいはこれに見て見ぬふりをしたと批判されている)

テロ・治安問題については、BJP は昨年 11 月のムンバイ事件を取り上げ、政府の対応を弱腰であると批判し、より強力なテロ対策を主張したが、今回の選挙ではテロ対策で BJP に票が流れるということはほとんどなかったようである。これは有権者がテロには関心がないというより、コングレス党のままでも、テロ対策の効果はあまり変わらないと判断したためと見られる。

BJP が、真面目、正直、清廉で飾らぬ人柄として知られ、多くの国民の尊敬を集めているシン首相個人を批判したことも有権者の反発を招いたようである。

5．新政権の政策見通し

選挙前の予想では、与野党の支持率は拮抗しており、選挙後に成立する政権は不安定になる恐れが指摘されていたが、結果はコングレス党の大勝に終わったため、今後安定した政権運営が期待されている。

とりわけ、新政権は左翼政党の協力を得る必要がなくなったという点が、5 年前の前政権発足時とは大きく異なる。前政権では、シン首相が経済改革や米印原子力合意に象徴される米国との関係強化を進めるにあたり、左翼政党が足かせとなってきた。2008 年 7 月には米印合意をきっかけとして左翼政党は閣外協力を撤回し野党に転じた。シン首相は辛うじて政権を維持したものの、危うく政権が倒れるところであった。そうした経緯から、左翼政党の協力を得ることなく成立した新政権に対し、経済改革推進への期待が大きい。具体的に新政権に期待される経済改革としては、年金改革、政府株の売却、労働法の改定、銀行業の自由化、小売業の外資への開放などが挙げられている。また、米印合意に強固に反対した左翼政党が選挙で敗北したことは、国民が全般的には米国との関係強化を肯定的にとらえているという見方も可能かも知れない。いずれにせよ、新政権は、米国との関係強化を一層推進するものと見られる。

総選挙後初の取引となる 5 月 18 日には、インドの株式市場は値幅制限を超える勢いで急騰し、

市場が停止する事態に至ったのも、今後の新政権の経済政策への期待が込められていた。見方を変えれば、前政権では経済改革の遅延の口実として左翼政党の存在を挙げることができたが、新政権ではそうした桎梏がなくなっており、経済改革を加速させ、高い経済成長率の達成など具体的な結果を出すことがより一層強く求められているとも言えよう。

6．日本との関係

新政権が、日本との関係強化を目指すという従来の政策を維持することは確実である。特に、私的訪問も含め 20 回以上の訪日経験を有し、親日家で知られるシン首相の続投は、日印関係の更なる発展という観点からは明るい材料である。

6 月 2 日には、麻生首相がシン首相に電話し、コングレス党の勝利及びシン首相再任への祝意を伝えた。その際、シン首相は、日本との戦略的グローバル・パートナーシップには、最高の優先度を置いている旨繰り返し述べ、日印二国間の課題である、経済連携協定(EPA)交渉の早期妥結、デリー・ムンバイ間の貨物専用鉄道建設計画(DFC)の実現に意欲を示すとともに、世界金融危機、気候変動、テロ、WTO といった地球規模の問題においても日本との緊密な協力を楽しみにしている旨述べている。新政権下において、日印二国間の友好関係が一層進展することが期待される。

なお、外相にはインド南部カルナータカ州の政治家で、カルナータカ州首席大臣やマハラーシュトラ州知事を歴任したコングレス党の S.M.クリシュナ上院議員が就任した。1999～2004 年にかけてカルナータカ州首席大臣を務めた際には、同州バンガロールを IT の一大拠点に成長させたことから、「現代バンガロールの父」とも称されている。同大臣は、トヨタ自動車の州都バンガロール郊外での工場開所式に出席し、また、森喜朗首相(当時)が 2000 年 8 月ニューデリーに先立って訪問した際には、大歓迎の先頭に立った。前政権末期で財務相をも兼任していたムカジー前外相は、閣内にとどまり財務相に専念するこことなった。

<筆者略歴>

1964 年　大阪生まれ
1986 年　外務省入省
　　米国 サウジアラビア ドイツ の各日本大使館勤務
2008 年　アジア大洋州局南部アジア部南西アジア課長

著書
『アフガニスタン祖国平和の夢』 朱鳥社　2004 年
『タリバンの復活』　花伝社　2008 年　　他

2. 猪俣 弘司 外務省南部アジア部長 講演 抄録

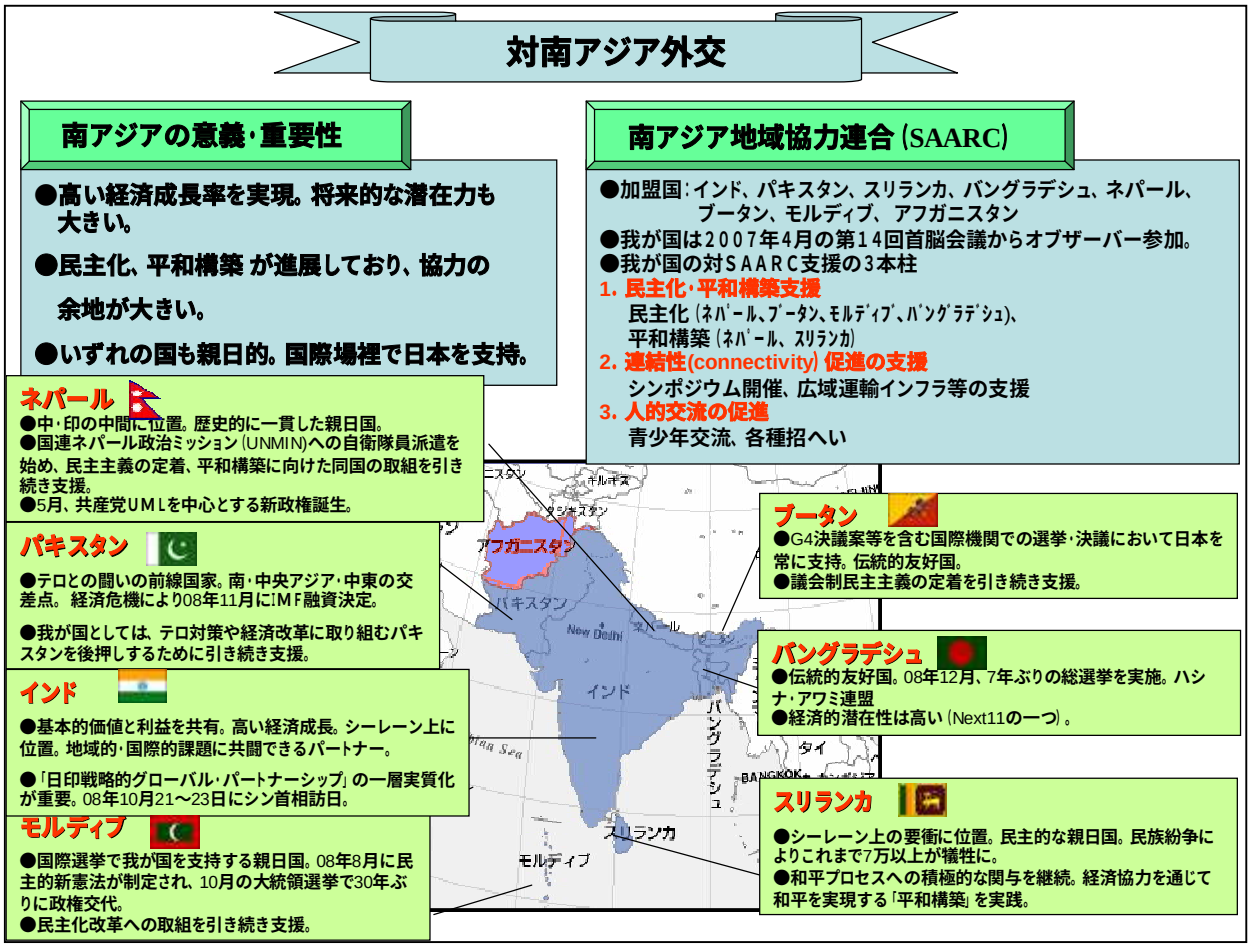
講演する猪俣南部アジア部長

5 月 29 日、当協会は、日印経済合同委員会との共催により、東京商工会議所国際会議場において、猪俣弘司 外務省南部アジア部長による、『緊張する南アジア情勢』と題し講演会を開催しました。

去る 4 月から 5 月にかけて、インドで行われた総選挙の評価を中心に、今後の多極化するインド外交、最近の日印関係のほか、昨今、問題が多発し緊張と不安が続いて注目されているインド周辺国についても、あわせてお話を伺いました。

パキスタンでは、国内にアルカイダやタリバンの拠点がアフガニスタンから進出し、各地でテロ事件が頻発し、治安情勢が悪化しています。ネパールに於いては、王制が廃止され武力闘争もやみ、ようやく左派マオイスト政権が誕生しましたが、19,000 名のマオイスト兵士の国軍への統合問題について国軍と対立して内閣が倒れてしまいました。難問は山積の状態です。スリランカは、タミル過激派「LTTE－タミル・イーラム解放の虎」との内戦がようやく終結しましたが、多くの難民とシンハラ・タミル両民族の対立をかかえ真の平和はまだ遠いようです。このような状況下で、緊迫する南アジアについて、外務省の責任者である部長からきわめて有意義なお話をいただきました。此処にお話のポイントとご披露いただいた資料(パワーポイント 以下 PPT)の一部をご紹介します。

<対南アジア外交全般>



PPT１ 対南アジア外交全般

南アジア７カ国は、いずれも親日的。国際場裡においても、日本の国連常任理事国入りにも支持してくれるなど、日本にとって重要な国々。経済成長率も高く潜在力も大きいが、それぞれ国内的にも対外的にも問題を抱えており、帰趨が注目されている。(詳細は P.7 PPT1 参照)

<多極化するインド外交>

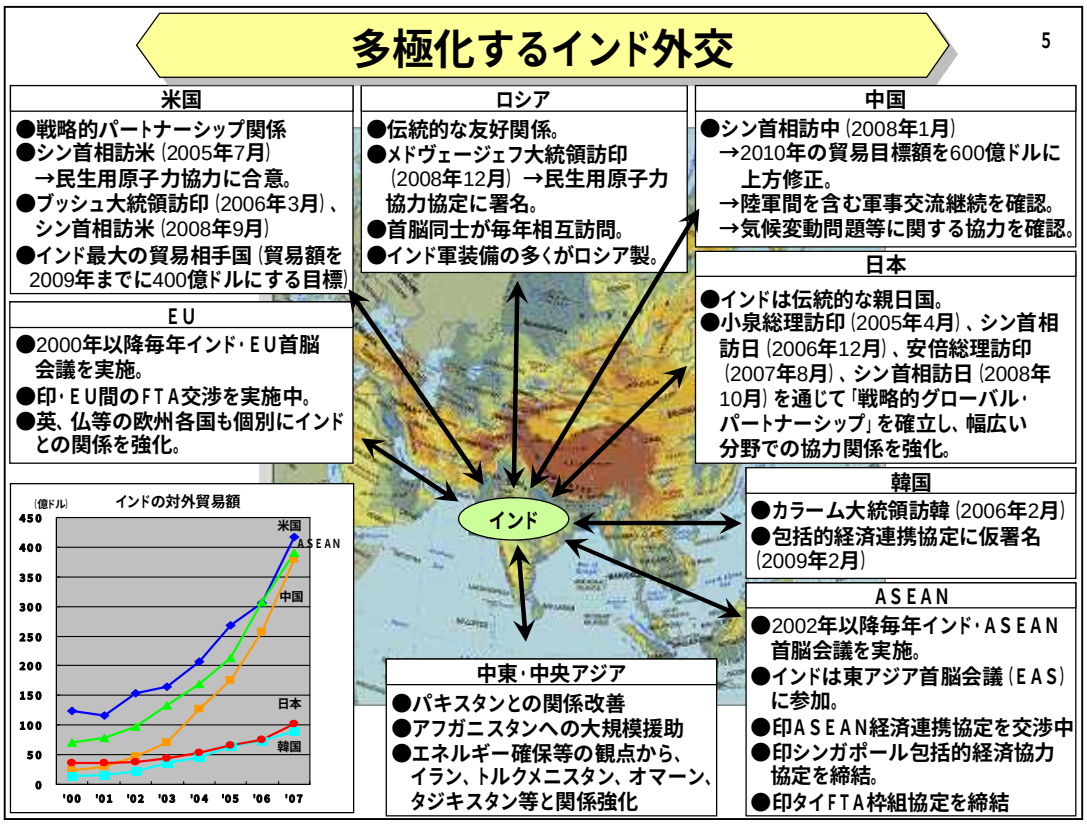
米　　国: インド最大の貿易相手国
　　懸案の民生用原子力協力に合意し、戦略的パートナーとなる。

ロ シ ア: 伝統的友好関係にあり軍事･兵器面では強い結びつき
　　08 年にはロシア大統領が訪印、首脳の毎年相互訪問を約束。

中　　国: 08 年 シン首相訪中、貿易が拡大、軍事交流も継続。

アセアン: 02 年以降 ASEAN の定期首脳会議にも参加、関係強化
　　シンガポールとの包括的経済協力協定締結。

(詳細は下の PPT2 参照)



PPT2 多極化するインド外交

<パキスタン情勢>

2007 年、ムシャラフ政権が、モスクに立て籠もったイスラム神学生を武力制圧して以来、イスラム原理主義勢力の拡大とアフガニスタンから進出したタリバン及びアルカイダの影響で急激に治安悪化。2009 年に入って、イスラマバード北方 150㎞ のスワート地区では、これらの過激勢力の活動等で情勢が悪化。政府は、一旦は懐柔策に出たが成功せず、ついに政府軍を投入して過激勢力を駆逐しようとしているが、長期化の可能性が大。また、主要都市ラホールやイスラマバードなど都市部を含む各地でテロが頻発、収束の見通しは立っていない。

(パキスタンへの国際的支援については、P.9 PPT3 参照)

パキスタン情勢

テロとの闘いの前線国家、アフガニスタンの安定にも密接な関係

主要ドナー国としての支援

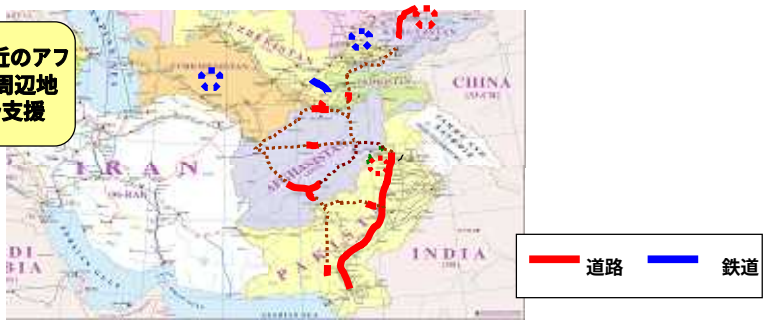
・2005年以降の総額10億ドルの円借款を含む、着実な支援の実施

・我が国は、貧困削減、人材育成等の分野において主要ドナー国として適切な支援を引き続き実施していく考え。

国際会議の開催

4月17日、パキスタンの安定と発展のため、東京でパキスタン・フレンズ閣僚会合及びパキスタン支援国会合を開催。我が国が世銀と共催した支援国会合では、主催国として最大10億ドルの支援を表明。参加国全体で目標額の40億ドルを超える50億ドル以上の支援表明があり、フレンズ会合とあわせて、我が国は国際社会の結束した支援を主導。

図: 我が国の最近のアフガニスタン及び周辺地域でのインフラ支援



PPT3 パキスタン情勢

スリランカ和平プロセスにおける我が国の取組み

明石政府代表の任命

● スリランカは伝統的に我が国の友好国であり、また我が国はスリランカの最大援助国。

●2002年10月、スリランカ政府からの要請を受け、我が国は**明石康元国連事務次長を「スリランカの平和構築及び復旧・復興」担当の政府代表に任命**。

●明石政府代表は、これまで17回現地を訪問。スリランカ政府、LTTE等の和平プロセス関係者に対し、**対話を通じた民族問題の解決を働きかけ**。

東京会議と4共同議長国

●2002年2月の停戦合意を受け、03年3月までに計6回の和平交渉を実施。

●**03年6月、「スリランカ復興開発に関する東京会議」を開催**
(共同議長：日、米、EU、ノルウェー)
→ 50ヶ国及び20国際機関が参加。
→ 国際社会が今後4年間で最大45億ドルの支援意図表明。

●**東京会議4共同議長会合の開催**
→ 東京会議の共同議長の間で、スリランカ政府とLTTEの対話を慫慂すべく、働きかけを随時実施。
→ 電話会談も含めアドホックに随時開催。

我が国の最近の取組み

1. 明石政府代表のスリランカ訪問 (4月30月～5月2日)

●ラージャパクサ大統領等に対し、国内避難民 (IDP)の安全確保や国連ミッションの受け入れ等を要請。かかる働きかけが奏功し、スリランカ政府は援助物資の増加や国連職員の安全地帯へのアクセス容認等の面で、一定の前向きな対応を見せた。

2. 国内避難民 (IDP)への人道支援

●5月1日、我が国はIDPへの支援のため、**最大400万ドルの緊急人道支援** (テント、水等の供与) を決定。

●5月15日には追加支援として、PKO法に基づき**4700万円相当の物資協力**を発表。

3. 外務大臣談話の発出と日・スリランカ首脳電話会談

●19日、スリランカ政府に①武器を置き降伏したLTTE要員の法の手続きに則った適正な取り扱い、②多数のIDPへの支援及び再定住に向けた取組、③国民和解のための政治プロセスの早期進展を求める外務大臣談話を発出。

● 同19日、麻生総理はラージャパクサ大統領は電話会談を行い、国内避難民の再定住や国民和解の進展について働きかけた。

PPT4 スリランカ情勢

<ネパール情勢>

5月4日、ダハール首相(マオイスト)辞任、5月末にネパール首相(共産党 UML)が就任。国内7カ所のキャンプに収容されているマオイスト 19,000 名の PLA 兵の国軍への統合に国軍司令官が反対。和平定着が大きな課題。

<スリランカ情勢>

本年3月、政府軍がタミル過激派「LTTE」の拠点をようやく武力制圧に成功。5月18日、首謀者プラバカランが殺害され内戦は終結。しかし、多数派のシンハラ人と少数派のタミル人の和解は遠い。また、多くのタミル人が難民化している模様。このまま平和が戻るのか見守る必要あり。日本は、明石政府代表を中心に和平努力を行ってきたが、今後も大きな役割を期待されている。

(スリランカ和平プロセスにおける我が国の取組みについては、P.9 PPT4 参照)

<インド情勢>

最近の下院総選挙で、コングレス党(国民会議派)が予想を遥かに上回って 53 議席増の 206 議席獲得、大躍進。コングレス党を中心とする与党連合の UPA(統一進歩連合)は、閣外協力も含め下院の過半数を獲得(下院総議席数は 543)。経済面では、過去 10 年間、平均 7.5%を超える安定した高度経済成長を実現する一方、穏健な経済改革や、農村部などの膨大な貧困層に対する幅広い地道な支援策が支持を集めた。昨年後半からは世界同時不況の影響もあり多少減速したが、中長期的には安定的な高成長が期待できる。他方、膨大な貧困層に対する、生活支援や雇用・教育対策、インフラ不足、エネルギー問題への対処等多くの課題がある。国内総生産はまだ、日本の5分の1、中国の3分の1、米国の15分の1であるが、それぞれの国の物価・購買力を調整した購

PPT5 インド情勢

買力平価ベースでは、世界銀行の統計でも日本に次ぐ世界第4位。インドの強みはソフトパワー、印僑、豊富な若年労働人口などあり。今後の経済開発への取組みが注目さる。

(詳細は P.10 PPT5 参照)

<最近の日印関係>

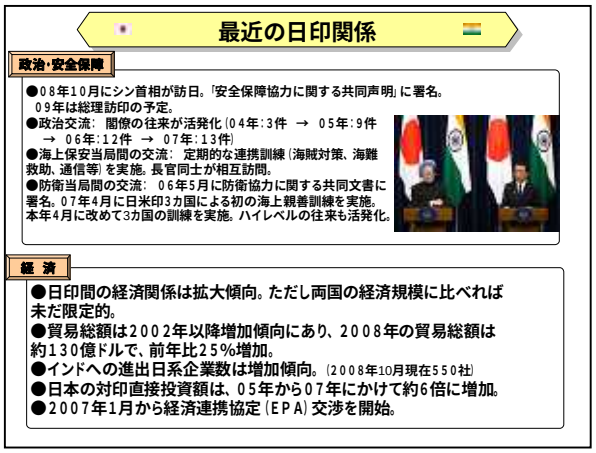
インドは伝統的な親日国で、最近行われた世論調査でも確認された。しかし、貿易面では印米間は勿論、印中間の貿易の急拡大に比べ、日印間は圧倒的に規模が小さく(1/3 以下)今後大きな努力が必要。

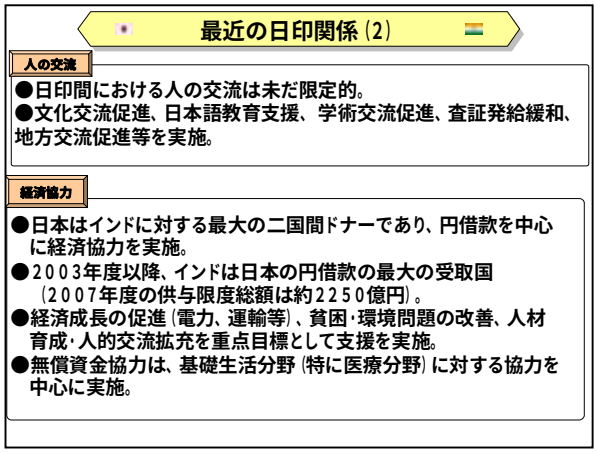
首脳の訪印が活発: 森 喜朗(00 年)、小泉 純一郎(05 年)、安倍 晋三(07 年)各総理訪印。

インドからは、ヴァジパイ首相(01 年)、シン首相(06 年、08 年)が訪日。

シーレーンの確保など安全保障面での交流は拡大。対印進出企業も増加(08 年 10 月　550 社)し、投資などの経済関係は拡大傾向。日本は毎年 2,000 億円を超える ODA の最大供与国であり、日印経済連携協定の締結交渉の妥結に向けて最後の詰めの交渉中。インド進出日系企業への支援ともなる、デリー・ムンバイ、デリー・コルカタ間の貨物専用鉄道建設計画（DFC）の推進や、デリー・ムンバイ間産業大動脈(DMIC)構想の実現に向け、更なる日本の協力が期待されている。

(詳細は PPT6 PPT7 PPT8 参照)

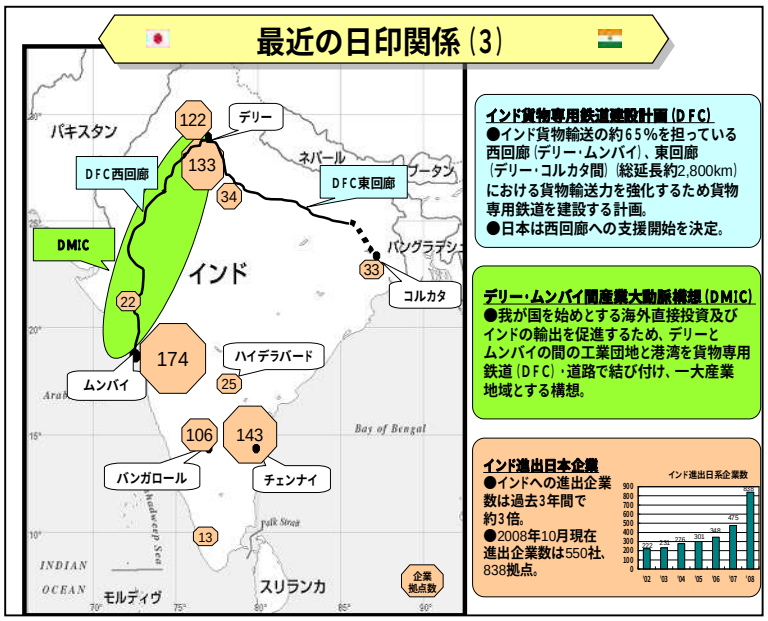




↑PPT6 日印関係１

PPT7 日印関係２ ↗

PPT8 日印関係３ →



<猪俣 弘司（ひろし）
外務省南部アジア部長 略歴>

1954 年 3 月生まれ
1978 年 外務省入省
　　タイ王国 米国
　　の各日本大使館勤務
1997 年 外務省北米局日米安全保障条約課長
2001 年 在韓国日本大使館 公使
2008 年 外務省南部アジア部長

3. 開発援助の先駆的 NGO オイスカ　～インドからの報告～

財団法人オイスカ南インド事務所長 M･アラビンド･バブ(M.Aravind Babu)氏からの寄稿です。今回はインタビュー形式でお届けします。

Q. いつ、どのようにして、NGO 活動に参加するようになったのですか？

10 歳のとき、“全ケララ子供フォーラム”という青少年団体に入りました。この団体は子供たちの自己啓発や地域開発に取り組む、アジアでも有数の規模の青少年団体です。17 歳でその団体の副代表になり、さまざまな地域に活動の視察に訪れる機会をもらいました。また政府要人の方々にお会いする機会もあり、インド大統領が出席した会合で司会を務めたこともありました。

その後、大学在学中に友人とインド青少年協会(Indian Youth Association)というボランティア組織を立ち上げました。1978 年にはその組織の代表として、ニューデリーの国際青少年センターで行われるさまざまなセミナーに参加していたのですが、その折、オイスカ･インターナショナル主催のエッセイ大会のことを知りました。「青少年の育成と地域協力」をテーマとしたこのエッセイ大会に応募したことが、私のオイスカとの最初の出会いです。そして 1985 年、カリカット市にささやかながらオイスカの支局を立ち上げることができました。

1995 年までは新聞社に勤めながらオイスカの活動に参加していたのですが、その間にオイスカ本部から招かれて、日本語や日本の伝統文化を学ぶ研修のため 3 ヶ月間オイスカ開発教育専門学校に滞在しました。この研修でオイスカの理念を学んだおかげで、その後職員にならないかと誘われたときに、オイスカならばインドの青少年や地域社会のために多くの貢献ができると確信を持つことができました。そこで勤めていた会社を辞め、オイスカ南インド事務所の所長として、NGO 活動という困難も多い反面喜びも多い仕事に身を投じることになりました。

Q. オイスカ南インド支部の活動について、教えてください。

<「子供の森」計画で
学校にマホガニーの苗を植える子供たち>

現在、地球環境の保全が国際社会における大きな課題であり、植林や人々の意識向上などが急務となっています。オイスカ南インド支局では、「子供の森」計画*や日本の企業･助成団体からの支援、また州政府との協働などを通じて、この 24 年間で約 2,400 万本の苗木を植えてきました。その功績を認められ、1998 年には「インディラ･プリヤダルシニ･ヴリクシャミトラ(「森の友達」の意)賞」という、インディラ･ガンジー元首相の名を頂くインドでも権威ある賞をいただきました。

また若者や女性を対象とした人材育成研修も私たちの重要な活動の一つです。若いアーティストを世に出すための芸術学校や、地方の貧しい女性たちに専門技術を教える自立支援プログラムなどを行っています。こうした研修を終えた多くの若者･女性たちが、経済的な自立を手にしています。

これらの成果もあって、オイスカ南インド支局は 2007 年に国連経済社会理事会の諮問資格「スペシャル」を取得しました。現在、多数の熱心な会員とともに、オイスカの理念をさらに広めるべく活動を続けています。

Q. 次世代を担う若者へ望むことは？

われわれ大人が正しい道筋を示すことができれば、若者は豊かな未来を創る大きな力になります。現在私たちは、高校生を対象とした「Social Awareness and Leadership Training (SALT: 社会認識とリーダーシップの研修コース)」を実施しています。ここでは、環境保全に関する知識や理解を深めるだけでなく、地球上の生命の大切さ、世界中の人々が違いを乗り越えて協力しあうことの大切さなど、若者がこれからの社会のリーダーとして育っていくために重要なことを教えています。

私たちはこれまで、誠実と献身を信条に活動を行ってきました。この 2 つを守ってきたからこそ、今のオイスカ南インド支局があるのです。次世代を担う若者たちにも、誠実さと献身の心を持って、地球環境と地域社会のために活動していって欲しいと思います。

Q. 今後、多国間の研修事業の実施も視野に入れているそうですね。
目覚しい成長の過程にあるインドの民間団体として、今後どのような形で国際社会への貢献を考えていますか？

<エコ･リソース･センター完成式典>
2009 年 2 月

2009 年 2 月、念願だったエコ・リソース・センターがケララ州ワヤナッドに完成しました。自然林の中に建てたセンターですが、樹木を 1 本も伐採せずに工事を完了しました。建設に当たっては、オイスカ南インド支部の構想に賛同した在チェンナイ日本総領事館から、「草の根・人間の安全保障無償資金」を通じて建設費の一部を提供していただきました。約 100 名が泊まれる宿泊設備も兼ね備えており、若者が一定期間滞在しながら、実践を通じた研修を受けることができます。今後、環境に関する意識向上研修のほか、若い農業従事者を対象とした有機農業指導や収入向上のための研修などを行っていく計画です。

また今後はインド国内だけでなく、アフリカや中東の国々の若者を受け入れて研修を行うことも考えています。急激な成長を遂げるインドの中で、環境を重視した活動を長年続けてきたオイスカだからこそ、そうした国々の若者に伝えられることがある。オイスカの哲学と理想を次世代に伝えることが、明るく輝く、そして健全な未来のために役立つと思うのです。

ありがとうございました。

<M･アラビンド･バブ(M. Aravind Babu)氏 略歴>

インド・ケララ州生まれ。
10 歳で青少年団体に加わり、マラバール地域会長およびケララ州副会長を務め、スリハナス V.V.ギリ大統領主宰の機関の代表となる機会を得る。
1974 年、インド青少年協会を設立し、役員の一人として今日に至る。
現 オイスカ南インド事務所長を務める。

<オイスカ･インターナショナル理事会にて>
2008 年 10 月

---

* オイスカが 1991 年に始めた「子供の森」計画は、子どもたち自身が学校の敷地や隣接地で苗木を植えて育てていく実践活動を通じて「自然を愛する心」「緑を大切にする気持ち」を養いながら、地球の緑化を進めていこうというプログラムです。参加している学校の生徒だけではなく、「地域の中心」である学校という拠点を活かし、家族や地域住民を巻き込むことでその地域全体の活性化も促進させます。2008 年 3 月末現在、26 の国・地域の 3,797 の学校が参加するまでにその輪が広がっています。

4. インドニュース (5月1日～5月31日)

Ⅰ. 内政

5月16日

- 下院総選挙の開票が行われ、コングレス党が改選前の145議席から206議席に大幅に議席を伸ばして第1党の座を維持。インド人民党(BJP)は138議席から116議席に後退。左派各派は大きく敗北。
  注目されていた第三勢力も総体としては伸びず。この結果、コングレス党がより強い力で与党・統一進歩同盟(UPA)内閣を組閣する可能性が出た。

- インド政府は、ニューヨークからドバイ経由でハイデラバードに到着した23歳のインド人男性が新型インフルエンザに感染していることが確認されたと発表。インドでの感染事例は初めて。

5月22日

- マンモハン・シン首相が大統領官邸で宣誓式を行い、首相に就任。翌日、新内閣が発表され、とりあえず6人の主要閣僚が任命された。プラナーブ・ムカジー前外相が財務相に、S.M.クリシュナ元カルナタカ州首相が外相に就任。A.K.アントニー国防相、P.チダンバラム内相は留任した。草の根会議派のママタ・バナジー党首が鉄道相、シャラド・パワール民族主義会議派党首が農業相に就任。なお、クリシュナ外相は、「米国、ロシア、中国、日本、EUといった主要国(major powers)との戦略的パートナーシップを強化する」との声明を発表。

> メモ:
> マンモハン・シン首相は言わずと知れた親日家。私的な訪問も含めると、これまでに20回以上訪日している。
> また、1980年から3年間、日印調査委員会（日印間の通商関係や経済協力のあり方を研究するために設立された日印民間有識者による研究会。1962年から1999年まで活動）のインド側議長を務めた経験がある。
> 1991年のインドの外貨危機の時に財務大臣を務めており、その際に日本が行った緊急援助に対して、今でも折に触れて感謝の意を表明している。
> なお、5年の任期を全うして2期目に入るのは、初代ネルー首相以来2人目。

5月24日

- オーストリアのウィーンで、シーク教同士の宗派間抗争が発生し、聖職者を含む2名が死亡。この事件を受け、インドのパンジャブ州内でもシーク教の同じ宗派間による抗争事件が発生。25日にはパンジャブ州内の数都市で外出禁止令が発出された。

5月25日

- サイクロンがコルカタをはじめとするインド東部地域を直撃。報道によると、西ベンガル州内において60人以上が死亡し、40万人以上が家屋を喪失した。

Ⅱ. 経済

5月1日

- インド商工省が発表した貿易統計によると、2008年度(2008年4月～2009年3月)のインドの輸出入額は、輸出が1,687.04億ドル(前年度比3.4%増)、輸入が2,877.59億ドル(同14.3%増)であり、貿易赤字は1,190.55億ドル(同34%増)となった。

5月4日

- インドの株価指数SENSEXの終値が12,134.75ポイントを記録し、7ヶ月ぶりに12,000ポイント台を回復した。SENSEXは3月9日に今年の最安値である8,160ポイントをつけたが、その後2ヶ月間で約50%回復した。

5月5日

- ビジネスライン紙他の各紙は、タタ自動車が発表した小型車「ナノ」の購買予約数が当初の予想を大幅に下回り、約20万台にとどまったと報じた。この理由について、各紙は、予約の際に支払う頭金が高いこと(販売価格の70%)、納品までの待ち時間が長いことなどが上げられると分析している。

5月11日

- インド自動車製造者協会(SIAM)は、2009年4月期の国内自動車製造数が前年同月比で10.19%増加、国内乗用車販売数も同じく4.36%増加したと発表。

5月18日

- 総選挙で与党側が大勝したことを受け、インドの株価が急騰し、午前中の取引で1日の値幅制限の限度額まで達した。SENSEXの終値は、14,284.21(前週末比17.3%増)となった。

5月19日

- 株式会社日立製作所と米国ゼネラル・エレクトリック(GE)社の合弁会社であるGE日立ニュークリア・エナジーは、インドのLarsen & Toubro Ltd.社との間で、インド国内における原子力発電所の建設に関する協力に合意したと発表。2008年10月に米印間で民生用原子力協力協定が署名されたことを受け、インドが米国から原子力発電所の建設や核燃料の供給などの協力を受ける道が開かれた。なお、インドは、米国のほか、フランス及びロシアとも民生用原子力協力に合意している。

5月26日

- ビジネス・スタンダード紙は、インド政府が、国有企業株式の売却による資金調達を目的として、民営化省を復活させる見込みと報じた。民営化省はインド人民党(BJP)を中心とするヴァジパイ政権時代に設置されたが、2004年のマンモハン・シン政権発足に伴い、閣外協力関係にあった左派政党が国営企業の民営化に反対したため廃止されていた。

III. 外交

5月20日

- ナラヤナン国家安全保障顧問、メノン外務次官がスリランカを訪問し、ラージャパクサ大統領と会談。ナラヤナン顧問とメノン外務次官は、4月24日にもスリランカを訪問していた。

5月25日
● インドがイスラエルから購入した早期警戒･情報収集機「AWACS」の1番機がインドに到着。

Ⅳ．日印関係

5月1日
● マルチ･スズキ社は、2009年4月期の国内販売台数が前年同期比9%増の約6万5千台になったと発表。3月期にも前年同期比14.6%増を記録していた。

5月2日
● 住友商事株式会社は、インドのグレーター･ノイダ市(ウッタルプラデシュ州、デリーに隣接)に鋼材加工、プレス成型等を行う鋼材加工センター(India Steel Summit Private Limited)を設立したと発表。2010年1月から稼働予定であり、自動車メーカーや家電メーカーの製品の原材料となる薄板の需要急増に応えるとしている。

5月7日
● 海上自衛隊の遠洋練習艦隊3隻がゴアを親善訪問。

5月15日
● 三菱商事株式会社は、三菱電機株式会社、韓国現代ロテム社及びインド BEML 社と共同で、バンガロールメトロ向け車両供給契約に調印したと発表。車両数は150両、受注金額は約350億円。なお、バンガロールメトロ建設計画は、地下鉄及び地上高架鉄道約33km の建設計画であり、平成17年度に日本政府が約450億円の円借款を供与した。なお、同コンソーシアムは、デリー･メトロにおいても、車両を納入してきた実績がある。

5月18日
● 住友金属工業株式会社は、インドの自動車部品メーカーである Amtek Auto Limited との間で、鍛造クランクシャフト(自動車のエンジン部品)製造のための現地会社を設立することに合意したと発表。

以上

5. イベント紹介

❖日印協会会員懇親会のお知らせ

前号でもお知らせしましたが、7月8日 水曜日、会員懇親会を開催致します。

「協会のスタッフってどんな人達？ 会員にはどんな人がいるの？」と思っていらっしゃる方、この機会に是非様子をご覧になって下さい。また、法人会員として出席される方には、インドに特化した異業種の方々との新たな出会いが期待できます。

“懇親会”という気の置けない雰囲気での、インド哲学から IT まで様々なジャンルに造詣が深い会員が一堂に会するこの機会を、お見逃し無く。

同封の参加申込用紙をご覧の上、どうぞ皆様お誘い合わせの上、奮ってご参加下さい。

❖インド舞踊公演のお知らせ

櫻井暁美さん率いる“インド舞踊塾ギータンジャリ”による公演が行われます。

日　時: 7月11日 土曜日　　第1回―14:00～　　第2回―18:00～
場　所: 大阪天満ドーンセンター(1F) パフォーマンススペース
問合せ: ギータンジャリ友の会　　〒576-0012　大阪府交野市妙見東3-4-7
TEL/FAX　050(3459)9334　　携帯　090(3994)4525

E-mail　eetakem@hyper.ocn.ne.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.geocities.jp/gitanjali1995/

❖インドを語る集い <様々なインド> 第 21 回開催のお知らせ

インドに駐在することになったご主人とともにやってきたニューデリーで、優雅なマダムの生活を満喫できると思いきや、そこはインド。日々の生活の中に驚きと発見が次々と現れます。インドのしたたさかと上手に付き合われた小林信子さんならではのお話を、お楽しみ下さい。

日　時: 7 月 31 日 金曜日　　18:00 ～ 19:30
場　所: 協会事務所　東京都中央区日本橋茅場町 2-1-14　スズコービル 2F
演　題:『インドでマダム、暮らしてみたニューデリー』
会　費: 協会会員 無料　(但し非会員 500 円)
申し込み〆切: 7 月 17 日 金曜日

詳細は、同封の参加申込用紙をご覧下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げております。

<第 27 回「タゴール歌曲の夕べ」>

4 月号で紹介致しました、協会会員の神戸朋子さん主宰の“タゴール歌の会「ションギタ」”による『タゴール歌曲の夕べ』が、5 月 9 日ミューザ川崎シンフォニーホールで開催されました。

この日は偶然ですがタゴールの 148 回目の誕生日にあたり、会場にはベンガル出身の在日インドの方々も参集しました。100 名を超える参加者は、ベンガル語での「ギタンジャリ」を中心に沢山の歌と演奏を楽しんでいました。

左から
モンディラ　望月 亜紀子
ハーモニアム　小間 智子
タブラ　久本 政則
歌　神戸 朋子
笛　仲林 利恵

<ガンジー像除幕式>

5 月 24 日(日)、インド独立の英雄 マハトマ・ガンジー像の除幕式が、杉並区の読書の森公園で行われました。ガンジーの等身大の立像(高さ約 2 メートル、重さ約 500kg)は日本初で、デリーにある「ガンジー修養所再建トラスト」から、「杉並区日印交流協会」に贈られたものです。当日はあいにくの小雨交じりの空模様でしたが、主催者、来賓、関係者を含め約 120 名の方々により、インドの伝統儀式に則って盛大に行われました。来賓として、ヘマント・クリシャン・シン駐日インド大使や、当協会の平林博 理事長、原佑二 常務理事が招待されました。

除幕の瞬間
シン大使(左)　山田区長(右)

除幕式では、シン大使、山田宏 杉並区長(マハトマ・ガンジー像設置記念事業実行委員会代表)、根本郁芳 杉並区日印交流協会理事長 等が挨拶され、ガンジー像の設置を契機として日印交流をさらに深めたいとの想いを熱く語られました。

ガンジー翁のチャルカと
サイン入り書籍

杉並区にはインド独立の英雄スバス・チャンドラ・ボースの遺骨を預かっている蓮光寺がある縁で、区立中央図書館には「ガンジー・コーナー」が常設されるなど、インドとの市民レベル

での交流を深めています。当日は、インド料理店マハラジャの河谷恵美子(KOTHARI)さんが提供して下さった、亡くなられたご主人がガンジー翁から直接頂いた糸紡ぎ(チャルカ)とガンジー翁自筆のサインの入った書籍が、特別に展示されました。

この立像の隣に、ガンジーの有名な教えである「７つの大罪」が書かれた(日本語・英語・ヒンディー語)銅版が置かれ、ガンジーの偉大さをより多くの人達に知っていただくうえでの重要なモニュメントとなっています。

ガンジー像と合わせて、多くの方々に祝福されました。

像向かって左

『7 つの大罪』

- 汗なしに得た財産
- 良心を忘れた快楽
- 人格が不在の知識
- 道徳心を欠いた商売
- 人間性を尊ばない科学
- 自己犠牲をともなわない信心
- 原則なき政治

像向かって右

6. 新刊書紹介

§『資料集 インド国民軍関係者証言』

編者: 長崎 暢子　田中 敏雄　中村 尚司　石坂 晋哉

発行: 研文出版(山本書店出版部)

定価: 10,000 円+税

ISBN978-4-87636-291-2

昨年 11 月号で紹介した、『資料集 インド国民軍関係者聞き書き』の続編で、「光機関」についての貴重なオーラル・ヒストリー(証言による歴史記述集)です。

第二次世界大戦中の日印協会の動きについても、触れられています。

7. 掲示板

<お知らせ>

スバス・チャンドラ・ボースの遺骨を預かられている杉並区蓮光寺の望月日康(もちづき にちこう)住職が、5月9日(土)午前3時47分ご逝去されました。5月14日お通夜、翌15日に密葬が行われ、平林理事長、原常務理事、青山事務局長が弔問に、森喜朗会長より弔電および生花をお送りしました。ヘマント・クリシャン・シン駐日インド大使からも生花が届けられていました。

謹んで哀悼の意を表します。

本葬は、6月24日水曜日 午後2時から、蓮光寺で行われます。

<次回の『月刊インド』の発送日>

次回の発送は、8月休刊でもあり、7月17日(金)を予定しております。

インドに関係のある催事のチラシなど、一定の条件を満たしている場合は、会報に封入する事ができます。同封のチラシをお読みの上、事務局までご連絡下さい。

<皆様のご意見歓迎致します！>

会員の皆様方からは、『月刊インド』、『現代インド・フォーラム』やホームページなどについてのご意見・ご感想を頂戴し、感謝しております。今後とも、忌憚の無いご意見をお待ちしています。

ホームページには、皆様の提言を投稿して頂けるコラムがございます。日印関係を更に良くするためのお知恵をお貸し下さい。〝談論風発〟を期待しております。

<編集後記>

今回のインド総選挙については、月刊といえども会員の皆様には鮮度の高い記事をお届けしたいと考え、巻頭に外務省の進藤雄介南西アジア課長による総括記事を持ってきました。

また、選挙後に行った当協会と東京商工会議所の共催による「緊張する南アジア情勢」の講演抄録では、講演に使用したパワーポイント・ファイルを抜粋し、要約を付けて掲載致しました。

2つの記事および恒例のインドニュースを続けて読んで頂く事によって、インドの総選挙結果分析や現状理解の一助となればと願っています。

ホームページでは、選挙・組閣、下院議長選出に関する速報をお届けしました。一般紙よりも早く情報をお届けすることができ、今更ながらホームページの利便性・即時性に感激です。

今後も、日印協会ならではの情報を発信できるよう、事務局一同頑張ります。

日印親善のために会員の輪を広げましょう

法人会員・個人会員の入会をお待ちしております。

1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係がより一層深まるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人	6,000円/口	☆入会金：個人	2,000円
学生	3,000円/口	学生	1,000円
一般法人会員	100,000円/口	法人	5,000円
維持法人会員	150,000円/口	(一般法人、維持法人会員共に)	

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.106 No.5 (2009年6月12日発行) 発行者 平林 博 編集者 青山 鑛一
発行所 財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: http://www.japan-india.com/